

障害に関わる差別や偏見について思うこと

甲府市立南西中学校一年 依田 茉優

私は、24時間テレビ想い～世界は、きっと変わる。を見て、改めて『差別や偏見のない世の中』になってほしいと思った。それは、24時間テレビの中で、子供六人を育てる大家族のお母さん、愛さんの話を見たからだ。

六人兄弟の末っ子、麗ちゃんは一才を迎えた時、アンジェルマン症候群という知的障がいや発達遅延、発語困難を伴う一万五千人に一人の割合で発症する難病にかかった。主治医からは、「一人で歩くのは難しい」「発語は一生諦めてください」と告げられた。愛さんはつらさを代わってあげられないことがきつく、普通の生活を麗ちゃんから奪ったのではないかと自分を責めた。しかし、他の子達に不安な姿を見せるわけにはいかないという思いから、家では懸命に明るく振る舞っていた。麗ちゃんと二人きりになると、暗闇にいるような感覚になり、毎日毎日泣いていた。そんな愛さんを助けたのは麗ちゃんだった。ずり這いで愛さんのもとに行き、笑顔で涙を拭いてくれた。ニコニコしている娘は本当に不幸なのか？それは自分が偏見を持っているだけなのではないか、と麗ちゃんに気づかせてもらった。愛さんは、これからの人生を上の子達のように幸せに生きられると思った。「母親として、麗を守り幸せにする。」と決意した愛さんは、家族に障がいの事を伝えた。「大きくなって今のように生活するのは、難しいかもしれないけど、それは不幸ではない。障がいがあるけど麗は不幸じゃない。」と泣きながら伝えた。すると、子供達は、兄として姉として自分に出来ることを考えすぐに行動に移した。写真に名前を貼り付けて、遊びながらも話せるように色々な方法を試した。

「『しゃべれない』って医者に言われて『歩けない』って医者に言われて『そっか、じゃあしょうがないね』ってなれなかった。」

と、兄の蓮さんは言った。歩くのは難しいと言われても家族全員で応援した。頑張りすぎて、発作が起きたこともあったけど、諦めずに練習して、ついに歩けるようになった。不可能だと言われた事を家族と一緒に乗り越えてきた。

しかし、麗ちゃんと一緒に外に出ると、「しつけがなっていない」「うるさいこの子」「ママ、この子怖い」など、差別や偏見をもったり、きつい言葉を言われたりした。『差別や偏見のない世の中に』声はあがっても、現実とはかけ離れ

ている。

愛さんは将来、楽しく安心して生きられる世の中にしたいという“想い”でインクルーシブ学童を作った。インクルーシブ教育とは、障がいのある子とない子が同じ空間で学び、共生社会の実現に繋げようという取り組み。学童では半数が、発達障害や自閉症などの子供達。言葉でなくても心と心で会話して、遊ぶときもケンカしたときも助け合って、自分と周りが違うのは間違いではないということを教えている。そんな愛さんは他にも、インクルーシブ美容室、インクルーシブ託児所、さらに、中学生向けのインクルーシブ学習支援も始めた。愛さんの姿を一番近くで見ていた、蓮さんと姉の心さんは、託児所と学習支援でお手伝いをしている。

『障がいのある人への差別や偏見のない社会。これを実現するのは容易ではない。それでも麗ちゃんが一步を踏み出したように、愛さんは決して諦めず今日も戦い続ける』

この言葉は私の胸に強く響いた。

私は、この話を見終わった時、涙がこぼれた。どんなに「平等」を目指しても、どんなに『差別のない世の中』を目指しても、障がいをもつ人への差別や偏見が無くなるかは、わからない。だけど、今、自分達に出来ることはある。それは、同じ学校で学ぶ、同級生との関わり方。私は、小学校や習い事でたくさんの人と出会ってきた。その中に、障がいをもつ友達もいた。始めは、あまり慣れていなくて、関わることをさけていた。だけど一緒に過ごす時間が増え、好きな事をして楽しみはしゃぐ姿を見て、話しかけるようになった。たくさん遊んで関わりをもつようになり、良い友達だと思った。初めて会ったときには、「あまり関わりたくない。怖い。」と思っていた。しかし、これは、障がいをもつ人に対しての偏見に過ぎない。今は、障がいをもつ友達に会った時、「仲良くなりたい。話したい。」と思う。それは、障がいをもつ人に対する偏見を無くしたからだと思はう。

これから、たくさんの人と出会いと別れをくり返す。その中で、障がいのあるなしに限らず、差別や偏見を捨て、どんな人にも積極的に話しかけて、仲良くなりたい。

そして、世界中の人が差別や偏見に苦しむことなく、笑顔で幸せに暮らしてほしい。そのために、自分に出来ることを見つけて、自分から率先して行動に移して、『差別や偏見のない世の中』に向けて、大きな一步がふみ出せるように、

一日一日を大切に一生懸命生きていきたい。